

半田災害新聞

号外

1944(昭和19)年
12月7日(木)
発行・NPO 法人
レスキューストック
ヤード

東南海にM8級大地震

最大震度6、津波被害も

七日午後一時三十六分ごろ、紀伊半島沖を震源とするM(マグニチュード)7・9の大地震が発生。津、静岡・御前崎で震度6、名古屋、岐阜、福井などで震度5を観測した。死者は一千二百人を超えるとみられるが、戦時中の情報統制のため詳細は明らかになっていない。



がれきの山ができた半田市内の街を歩く人々(半田市役所提供)

半田の飛行機工場倒壊

学徒動員の生徒ら下敷き

名古屋大学などの調査によると、三重県を中心に津波による大きな被害が発生。尾鷲地方では五十以上の大津波によって壊滅的な被害が出ている。全半壊家は九万四千戸余りに達し、道路や鉄道、

橋などの交通網も各所で寸断されている。ただし、大本営発表では被害は軽微と強調。逆に米国の主要紙は一面で「日本の中部地帯で大地震」「軍需工場に壊滅的打撃」などと報じている。

外しており、建物の強度に大きな問題を抱えていた。生存者の一人によると、工場の作業中に「地震だ!」という叫び声とともに屋根の窓ガラスが崩れ落ちてきた。生徒らは逃げようと出口に殺到したが、工場は機密保持のため重い扉で半分ふさがれ、生徒らが押し合いへし合いしている間に建物は崩壊。がれきの下からは「助けてえ」「お母さん」などのうめき声や悲鳴が飛び交っていたという。

この大地震で愛知県半田市山方新田の中島飛行機半田製作所山方工場が倒壊、

生産の邪魔だとして、屋根を支えていた支柱をすべて

学徒動員で戦闘機の部品製造などに従事していた半田工業(後の半田商高)生徒四人を含む百五十七人が死亡した。

関係者によると、同工場は旧東洋紡半田工場を一部改築した建物で、一九〇二(明治三十五)年ごろ建てられた古いれんが造り。柱や壁の中に鉄筋などは入っていないかった。さらに、軍需工場に転用する際に機体



倒壊した中島飛行機山方工場。半田工業の生徒ら157人が犠牲となった(中日新聞社刊『恐怖のM8』より)

巨大地震、再び直撃

半田災害新聞

号外

1945(昭和20)年
1月13日(土)
発行・NPO 法人
レスキューストック
ヤード

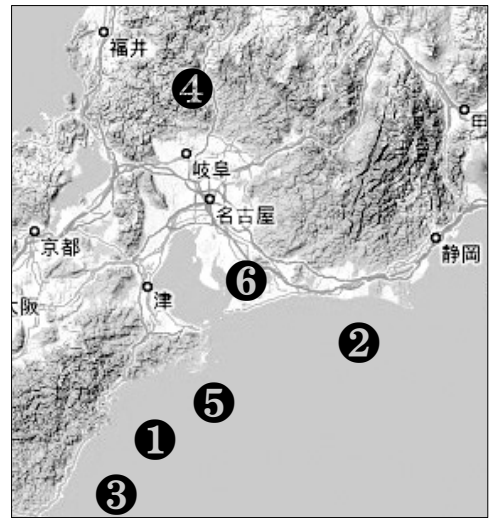
三河地方にM6.8

十三日午前三時三十八分ごろ、愛知県三河地方を震源にM(マグニチュード)6.8の直下型地震が発生、安城や西尾などで最大震度7の揺れがあったと推定される。M8クラスだった先月七日の東南海地震からわずか一カ月余り。追い打ちを掛けるような相次ぐ巨大地震に、戦時下の被災者は途方に暮れている。



名古屋大学の調査などによると、今回の地震による死者は二千三百六人に上り、先月の東南海地震による死者数を上回る。全半壊の家屋は約四万八千戸。地震の規模を示すマグニチュードは小さいが、震源直下の三河地方の狭い範囲に強烈な揺れが襲い、甚大な被害

倒壊した家の外で食事をする被災者たち (中日新聞社刊『三河地震60年目の真実』より)



最近の主な地震災害

- ① 1707年 宝永地震 M8.4
- ② 1854年 安政東海地震 M8.4
- ③ 1854年 安政南海地震 M8.4
- ④ 1891年 濃尾地震 M8.0
- 1896年 明治三陸地震 M8.5
- 1923年 関東地震 M7.9
- 1927年 北丹後地震 M7.3
- ⑤ 1944年 東南海地震 M7.9
- ⑥ 1945年 三河地震 M6.9

(中日新聞社刊『いま活断層が危ない』参考)

未明の揺れ 被害拡大

被災者は自炊、自力再建

をもたらしたとみられる。名古屋では震度5程度の揺れだったと推定され、死者八人。半田市では十二人が亡くなり、五百戸近くの家屋が全半壊した。

一方、名古屋周辺の米軍による空襲は激しさを増し、戦争は厳しい状況となっている。大本営による情報統制もさらに進み、今回の地震被害の報道や調査は厳しく制限されているのが実情だ。

三河地震はほとんどの人が寝静まった未明の時間帯を襲った。木造家屋が倒壊して押しつぶされたり、転倒した家具の下敷きになったりして多くの人命が奪われた。

さらに、東南海地震同様、戦時下の特殊事情も悲劇を広げたようだ。軍需工場の多い名古屋では空襲の危険性が高く、今回の被災地にも多くの児童が集団疎開にきていた。児

童や引率教師らは主に寺院で寄宿生活を送っていたが、屋根が重く、壁も少ない寺院の本堂の多くが地震で倒壊。戦災を避けるため農村地帯へ疎開したにもかかわらず、予期せぬ地震の犠牲になった児童は五十人以上いた。

また、生き残った被災者も、戦争の物資不足の中、自力での生活再建を余儀なくされている。農家はもともとある食糧や井戸水で自炊し、わらや竹で仮住まいを確保。住宅再建用の資材も現金でなく、米や麦との「物々交換」で調達しているという。